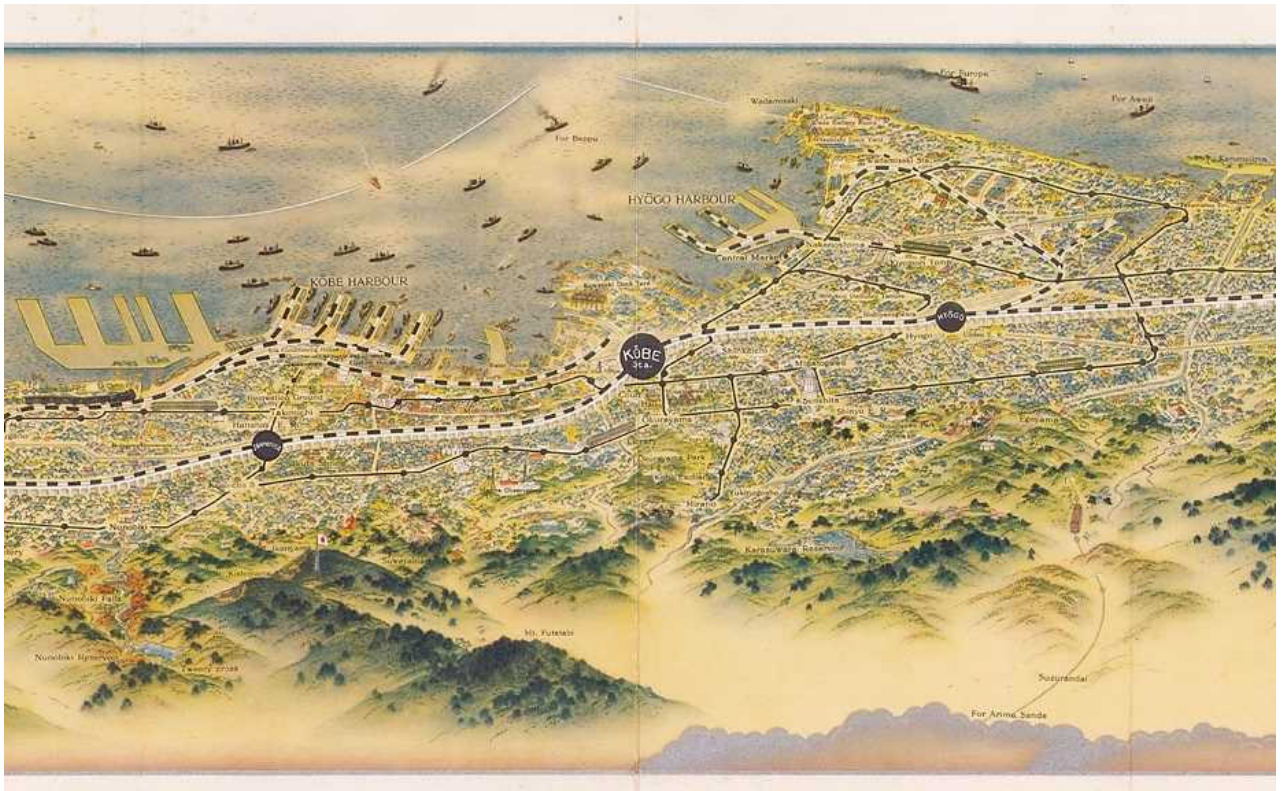


# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 76 号 平成 26 年 3 月 20 日  
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



『Kobe bird's eye view』Municipality of Kobe (部分)

## 鳥瞰図

鳥瞰図とは、「地表面を上空から斜めに見下ろしたようすを図に描いたもの」（『日本大百科全書』）で、絵画的で見た目にも美しい図です。その源流は江戸時代の旅案内・道中案内とも言われています。

大正から昭和初期にかけての鉄道旅行ブームの頃から吉田初三郎ら商業画家が多くの作品を制作しました。景勝地・寺社・公園など当時の観光名所を読み取ることができます。

『Kobe bird's eye view』は、昭和十二年（一九三七）頃の神戸市を中心に、大阪から姫路までを山側から見下ろした鳥瞰図です。英語の表記や裏面に英文の市内案内があることから外国人向けに神戸市を紹介するため作られたと思われます。

現代の神戸を緻密に描いた鳥瞰図もあります。『神戸絵図』（石原正著）では、一九八一年当時の神戸が建物のひとつひとつまで細かく描かれています。その作風に影響を受けた『港町神戸鳥瞰図』（青山大介著）が昨年発行されました。

鳥瞰図は、神戸の名所旧跡を鳥になつて上空から眺めてみたいという夢をかなえてくれます。

神戸街角今昔 兼先勤（神戸新聞総合出版センター）

神戸市のタウン誌「K O B E グー」に二〇〇八年四月から二〇一二年六月まで連載された「街角今昔」をまとめたもの。五年分計五十一回の連載に加筆修正。単行本化に当たり未発表の写真なども数多く加えられている。

中央区を中心に灘区から垂水区までの貴重な写真が解説とともに見開きで紹介される。

鉄道好きな著者らしく、神戸の市電や阪神大-water害当時の駅舎など鉄道関係の写真が充実するが、鉄道以外にも聚楽館など昭和の神戸の様子を知るのにも役立つ。

大番頭 金子直吉 鍋島高明（高知新聞社）

かつて神戸に世界的な総合商社があった。玉岡かおるの小説『お家さん』でも知られる「鈴木商店」である。番頭として手腕をふるったのが高知県出身の金子直吉。天賦の商才を発揮し、「怪物」と称された直吉の人生が描かれる。

平成二四年に高知新聞に連載されたものに加筆修正し、取材余話を加えたものである。



中内功のかばん持ち―昭和のカリスマと呼ばれた男 恩地祥光（プレジデント社）

ダイエー中内功CEOの秘書、かばん持ちとして最も身近で仕えた著者が「中内さんとは、こんな経営者だったのか」と読者に思い起こさせるエピソードを紹介する。

後半では筆者が経営企画本部長として関わった、リクルートやアラモアナショッピングセンター買収など大型M&A案件やドーム球場建設のインサイドストーリーが綴られる。中内氏が「ビジネスマンとして最も大切な特質」としたのは「オネスト」。学歴問題や幹部の収賄発覚に対し、「正直さ」で向かい合った逸話が印象に残る。

探偵小説の街・神戸 野村恒彦（エレガントライフ）

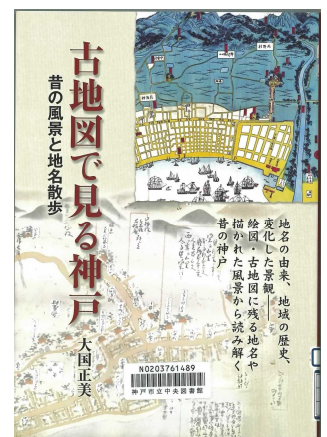
神戸では、横溝正史など探偵小説にゆかりのある人物が多く生まれた。戦後、神戸で結成された「関西探偵作家クラブ」では、探偵小説の翻訳で知られる西田政治らが活発に創作活動を行った。

探偵小説をこよなく愛する著者が、多くの資料に基づき神戸に関わる作家と、神戸を舞台とするミステリー作品を紹介する。

古地図で見る神戸―昔の風景と地名散歩 大国正美（神戸新聞総合出版センター）

近世や明治初期に描かれた神戸の絵図や古地図の数々を紹介する一冊。その範囲は東は深江から西は舞子、北は有馬や岡場までを取り上げている。

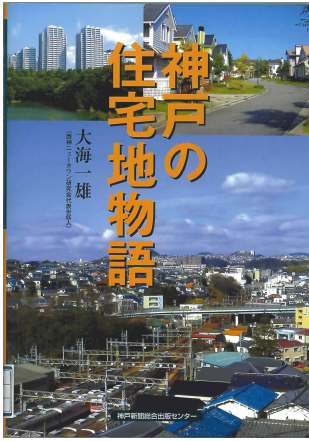
江戸時代にあつた生田神社から海岸までの桜並木の参道、処女塚の様子、開港前後の神戸の町並みなど、絵図などの記載から当時の各地の様子を読み取り、紹介する。また、現在と比較し、今も地名に残る社寺やため池の名称なども豊富な図版を交えて説明され、興味深い。



カメラが撮りえた兵庫県の昭和『歴史読本』編集部編（KADOKAWA）

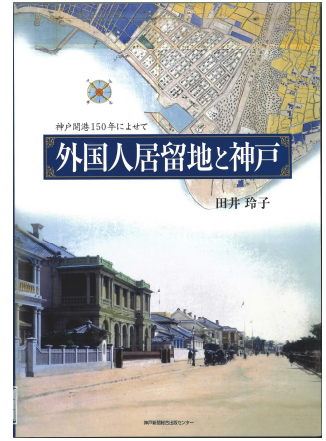
「昭和3年の生野鉱山」「昭和20年の神戸空襲」から「昭和63年の三宮センター街のアーケード」まで一頁に一枚ずつ、時代順に集積された写真集。

新聞社、図書館などの提供する写真の大半は神戸市、次いで西宮市、姫路市が占め、簡潔な説明文とともに貴重な記録となっている。



**外国人居留地と神戸 神戸開港150年**によせて 田井玲子（神戸新聞総合出版センター）

兵庫開港後、外国人居留地は西洋文化摂取の拠点となり、その影響は現在の神戸にも色濃く残る。本書では、居留地、雑居地の歴史、文化、そこで活躍した外国人たちのエピソードなど居留地の全てが余すところなく紹介される。当時の景観や、生活ぶりがわかる写真、絵地図、錦絵などの資料が豊富で、視覚的にも理解しやすいよう構成されている。



**神戸の住宅地物語** 大海一雄（神戸新聞総合出版センター）

西神中央、鈴蘭台、六甲アイランドなど、団地やニュータウンとも呼ばれる多くの住宅地を持つ神戸市。それら郊外住宅地には神戸市人口の三分の一が住むという。

神戸市は山と海に挟まれ、手狭な旧市域へ集中する人口を分散させるため、近隣町村との合併を繰り返して、住宅地開発を続けてきた。本書ではその歴史を概観する。箱木の千年家や北野の異人館街など歴史あるトピックから語り起こし、町村合併だけでなく、阪神大水害や震災、震災からの復興を経て現在に至る経緯を興味深く知ることができる。

**夢の病院をつくる NPO 法人チャイルド・ケモ・ハウス**（ポプラ社）

二〇一三年、ポトアイルランドに、小児がん専門の治療施設が誕生した。これまで、小児がん患者は長期間、痛みや抗がん剤の副作用と闘ってきた。この施設は患者も家族も医療関係者も快適に、がコンセプト。施設実現に携わった多くの人の熱い思いが伝わってくる。

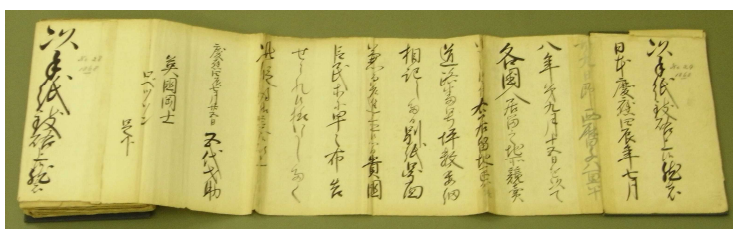
書庫探訪 その32

『兵庫縣廳より英国領事宛通牒集』

慶応3年12月23日から明治6年10月28日までの兵庫県庁や裁判所などから英国領事や代理副領事宛てに送られた約千通の手書き書翰集。内容は、挨拶状や各種の通知のほか英国人と日本人の法的紛争に関するものです。文書の送付者には初代県知事の伊藤俊輔（博文）や陸奥陽之助（宗光）の名前もあります。

兵庫開港にともない居留地を設置することになりますが、文書の中には、慶応4年7月29日（1868年9月15日）に居留地を競売するという公告があります。

当時外国人に関する事件は、領事館で裁判を行う領事裁判制がとられていましたが、日本人が被害者や債権者である場合、英国領事の適正な処理を要求する文書を出しています。逆に日本人が加害者で、領事館からの申し入れに回答したものもあります。開港当時の様子や外国人との間にどのような紛争があったのかなどを具体的に知ることができる資料の一つです。



II その他の新刊 II

**高階杞一論 詩の未来へ** 山田兼士（濤標）

**生あるかぎり言葉を集めー神戸、この街で** 安水稔和（神戸新聞総合出版センター）

**真のエリートを育てる灘・開成の教育** 朝日小学生新聞編集部編（朝日学生新聞社）

**新兵庫史を歩く2 NHK神戸放送局編**（神戸新聞総合出版センター）

須磨のお屋敷町

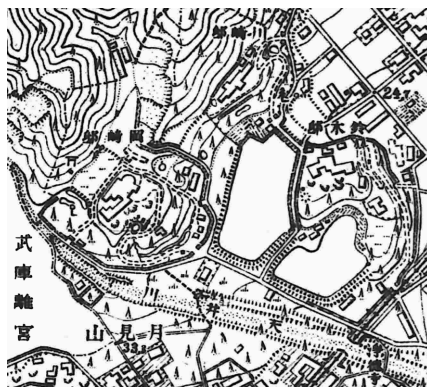
今年二月にピッコロ劇団で舞台化、つづいてテレビドラマ化もされる玉岡かおる原作『お家さん』の主人公は鈴木商店店主の鈴木よね。大正七年に起きた米騒動・鈴木商店の焼き討ち事件は学校で習ったという人も多いと思います。

鈴木商店の本店があったのは現在の中央区相生町ですが、ここが焼打ちに遭ったのは、あくどい商売が人々の反感を買ったためと言われてきました。しかし、実際はマスコミによる情報操作に惑わされた人々によつて引き起こされた事件であったことを城山三郎が地道な取材により、小説『鼠―鈴木商店焼打ち―』で明らかにしています。

鈴木商店の主であった鈴木よねの邸宅は須磨区若木町二丁目にありましたが、現在その跡地には社宅が立ち並び、当時の建物は全く残っていません。ただし、小高くなっていた敷地の周囲、また屋敷地出入り口の石垣に当時そのままの部分があり、これがわずかに残された鈴木邸の遺

構ということになります。

ところで、図書館が所蔵する古い地図を刊行年順に見くらべると、鈴木邸を含め、このあたりの土地の来歴をたどることができ、興味深いものがあります。須磨といえは高級住宅街というイメージがありますが、そのとおり多数のお屋敷が存在していました。



大正12年(1923) 一万分の一地図に見える  
武庫離宮・岡崎邸・川崎邸・鈴木邸 (一部改変)

明治二十一年に山陽鉄道兵庫・明石間が開通すると、明治後半から須磨は豪商など富裕層の屋敷町として開発されていきます。明治三十一年版の二万分の一地図では田畑のほかにはお寺と神社、昔からの小さい家ばかりですが、大正十二年版以降の一万分の一地図では、一帯がお屋敷町に変貌しているのを確認できます。鈴木邸の文字を探すと、大正十二年版以降昭和五年版まで記載があり

ますが、昭和十年版にはありません。また、母屋おもやの建物自体は昭和十年版にも描かれていますが、次の昭和二十七年版では姿を消し、代わりに小さな建物が数多く描かれています。

鈴木邸の南と西には溜め池がありました。南の溜め池は昭和五年版の地図には描かれていますが、十年版では埋め立てられています。西側の池は現在住宅地として造成が行われている須磨高等学校跡地にあたりますが、昭和二十七年版までその存在が確認できます。須磨高等学校は昭和三十年に当地に創立されるので、校地として利用するためにこの池が埋め立てられたものと考えられます。

そしてこの池の西に岡崎邸、北に川崎邸の文字がみえます。川崎邸は川崎正蔵によって設立された重化学工業・製鉄・汽船を中心とする川崎財閥当主の邸宅、岡崎邸は山崎豊子『華麗なる一族』のモデルとなった岡崎財閥当主の邸宅です。現在、川崎邸跡地は聖ヨハネ修道院などに、

岡崎邸の敷地五ヘクタールは離宮公園の植物園となっています。岡崎邸の洋館は阪神大震災で倒壊するまで現地に残っていました。

さらにその西どなりには現在須磨離宮公園本園となっている武庫離宮

の広大な敷地(十八ヘクタール)が広がります。ここが離宮となったのは大正時代で、それ以前は大谷探検隊や二楽荘で有名な大谷光瑞の月見山別邸がありました。そもそも東灘区岡本にあった二楽荘は月見山別邸が離宮として買い上げられた代わりとして建築されたものなのです。

山寄りの邸宅群は西へさらに小曾根邸、須磨遊園地・須磨寺をはさんで川西邸・山下邸と続きます。海岸寄りの高台には須磨閑地の隣地に九鬼邸、その西に久原邸・藤田邸の文字を見ることが出来ます。一万分の一地図に名前が載るほどの大きな屋敷だけでもこれだけの数で、もう少し規模の小さな屋敷はその数倍を数えることができます。

図書館二階ふるさと文庫で下調べの上、古い地図と新しい地図を対照しながら、現存するお屋敷、失われてしまったお屋敷の跡を訪ねての須磨散策はいかがでしょうか。

参考文献

- 『神戸および周辺地形図 一万分の一 須磨』
- 『須磨』 須磨神戸市編入五十周年記念行事協賛会

- 『モダニズム再考 二楽荘と大谷探検隊 I』・『同II』 芦屋市立美術博物館 ほか